

臨床研究の道標 第2版 上・下巻

福原俊一 ● 著

〔評者〕 菊地臣一 (福島県立医科大学 常任顧問 兼 ふくしま国際医療科学センター 常勤参与)

畏友で、同志でもある福原俊一先生が『臨床研究の道標(みちしるべ)』の第2版を出版された。第2版は、2013年に出版された第1版と違って、上・下の2巻で構成されている。

第1版の発行から4年での第2版、しかも上・下2巻と、より充実した内容である。この事実は、いかに臨床研究の領域が深化し、そして多岐に渡り、しかも進歩が早いかを示している。もう1つは、医療者の臨床研究への関心が高くなっていることを明らかにしている。私が若かった頃、「私の経験では」という言葉が学会では通用していた。本書が好評を以て迎えられている事実は、そのような時代が今は過去になったという証左でもある。

わが国のこのような現状をみると、臨床研究の第一線の今が、米国の知人達の研究室に近くなっていると感じる。私の見聞しているところでは、質の高い研究室では、スタッフが下巻5章に記されている研究デザインの「型」をいくつかの雛型から選び、そこに結果を入力していく。本書をみると、わが国もこのレベルに達しつつあるかなという感慨を抱かせる。

本書の内容が、多くの医療者に受け入れられて、理解され、そし

て身に随けていくと、多数の国際誌に論文をどんどん投稿できるのも夢ではない。

一方、気になっていることがある。多分、杞憂であると思う。しかし、年寄りの冷水と謗られることを覚悟で記す。それは、著者が初版の序文で記してある、「臨床研究の大前提、そもそもの原点は医療者の『心』にあります」という記述から抱く危惧である。

私は、臨床のあらゆる現場で働いてきた。その結果、「真理や真実は common disease や common injury のなかにある」ということに気付いた。毎日、同じような患者さんを愚直に診てみると、そこに共通の事実を見い出すことがある。それが臨床研究の種子である。

昨今の診療では、聴くアートが医療機器による検査に置き換わっているのではと思わせる場面がある。そこでは「医療者の心」は育ちにくい。

「医療者の心」は、日々、患者さんと接して初めて医療の疑問や矛盾、あるいは常識とは異なる事実に気付く。それを医学に進化させるのが臨床研究である。



医療者にとっての理想は、EBM というサイエンスと NBM というアートの統合である。

本書は、医療のサイエンスを身に着ける最良の書である。上・下巻合わせて7,600円である。若き医療者にとっては安くはない。しかし、それだけの価値はある。

A5版

上巻 248 ページ・下巻 264 ページ

2017年

定価：上巻・下巻 各3,800円＋税

ISBN 上巻：978-4-903803-26-5

下巻：978-4-903803-27-2

認定 NPO 法人 健康医療評価研究機構 iHope International 刊